

序論)

今日は2ヶ月に1度の富川福音教会、日高キリスト教会合同礼拝となっております。この合同礼拝は共に聖餐式を行うためのものですが、さて、私たちの聖餐式は正しい聖餐式となっているのでしょうか。

先ほど読んでいただいた聖書箇所は、コリント教会があまりにも聖餐式の本来の姿とはかけ離れたやり方をしていたので、パウロが彼らを叱っている箇所となっています。パウロの怒りを買ったコリント教会の聖餐式のやり方とはどういうものだったのでしょうか。そしてなぜパウロはそれほどまでに彼らのやり方を怒っているのでしょうか。今日は御言葉から、聖餐式の本質とは何なのか？そして、私たちが聖餐式を受けるにあたってどんなことに心がけていくべきなのかを教えられていきたいと思います。

初代教会の聖餐式とコリント教会の問題)

今日の箇所を理解するにあたって、初代教会の聖餐式と現代の私たちが行っている聖餐式とのやり方の違いを理解する必要があると思います。

初代教会の時代、人々は日曜日だけではなく、平日もそれぞれ家の教会に集まって集会をしていました。彼らはあそこで食事をとり、お祈りをし、み言葉を聞き、そして聖餐式をしていたのです。ですから、その家の教会においては、食事の交わり、愛餐と聖餐式はセットで行われていました。

ところがパウロは、その彼らの集会が、益になるものではなく、むしろ害になっていると断言しています。17節を読みましょう。

11:17 ところで、次のことを命じるにあたって、私はあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが益にならず、かえって害になっているからです。

先回、女の人がかぶりものを外して礼拝に参加しているという問題を話すにあたって、最初にコリント教会の人たちのことをほめていました。「あなたたちはわたしの言うことをよく守っているよね」とそのように褒めてから、被り物の問題について話しを始めていたのです。

ところが、この聖餐式の問題については「私はあなたがたをほめるわけにはいきません」と言い、彼らのやり方は害となるようなやり方であると宣言しているので

す。なぜでしょうか？ それは彼らが一致のない、間違ったやり方で聖餐式をしていたからです。18 節 19 節を読みます。

11:18 まず第一に、あなたがたが教会に集まる際、あなたがたの間に分裂があると聞いています。ある程度は、そういうこともあろうかと思えます。

11:19 実際、あなたがたの間で本当の信者が明らかにされるためには、分派が生じるのもやむを得ません。

18 節の分裂というのは、1 章で言われたような「私はパウロにつく、私はアポロにつく」といったような。派閥争いをするような分裂ではなく。バラバラに分かれている、一致がない状態のことを言っています。

パウロは、コリント教会がバラバラに分かれていることを指摘しながら、「ある程度は、そういうこともあろう」とか、「分派が生じるのもやむを得ません」と言っていますが、これは分裂していることを認めているのではなく、本当の信者とそうでない者が明確になるためには、そのような分派が生じるのも仕方ないといった、皮肉的な表現です。コリント教会の中には正しい姿勢で聖餐式をしようとしている人と間違ったやり方で聖餐式に臨んでいる人がいたということです。

1) コリント教会の具体的な問題点

では具体的にどのような問題があったかということ 20 節から 22 節を読みたいと思います。

11:20 しかし、そういうわけで、あなたがたと一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにはなりません。

11:21 というのも、食事のとき、それぞれが我先にと自分の食事をするので、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だからです。

11:22 あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか。それとも、神の教会を軽んじて、貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせたいのですか。私はあなたがたにどう言うべきでしょうか。ほめるべきでしょうか。このことでは、ほめるわけにはいきません。

これはどういうことかということ、当時裕福な人たちは早めにもその家の教会に集まって、自分が持ってきた食事を食べてしまっていました。中にはお酒を一杯飲んで酔いつぶれているような人もいたのでしょう。ところが、貧しい人は労働者として

の仕事があり、そんなに早く家の教会に集うことはできません。彼らは一日中、一生懸命働いて遅れて家の教会に来るわけであります。しかし、その家の教会に集ってみると、実際には食事はほとんどなく、場合によっては聖餐式のパンと杯にもあずかることができない、そういうような状態があったようです。

皆さん想像してみてください。裕福な人たちが先に家の教会に集まって食事をし、パンやぶどう酒をいっぱい飲んだり食べたりして聖餐式をし、貧しい人が後から来て、残りかすのようなパンとこれもまた残り物のぶどう酒で聖餐式をする。イエス様が言われた聖餐式と言えるでしょうか。後から来た貧しい人たちが聖餐式をする時、自分たちの座る席は会場の末席で、与えられたパンとぶどう酒もわずかなものであったとき、自分たちは教会の中で立場の低い惨めな者なのだということを思い知らされないでしょうか？

皆さん、これはですね、当時のコリントの町においては、ある意味では当たり前のことでした。コリントの街は非常に栄えている街で、だからこそ、貧富の差や身分の差が大きかったのです。ですから、富んでる人は優先的に食事を食べ。貧しい人は、末席でわずかなものをいただく。というのは、コリントの中でよくある光景でした。でも、パウロはそれが教会の中で同じようにされているのは間違っていると、そう主張しているのです。

なぜなら、教会における聖餐とは、ただの食事の交わりとは違うからです。

2) 聖餐の本質（意味）

パウロは 23 節から 26 節で、聖餐式の本質的な意味について説明をしています。私たちが聖餐式でいつも読んでいる箇所ですね。丁寧に読んでいきたいと思います。

11:23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、

11:24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

「主イエスは渡される夜、パンを取り、」というのはイエス様がユダに裏切られ、人々の手に渡される夜、十字架の受難をうける前の日のことです。

その時に献げられた「感謝の祈り」とは、単純に食事ができてありがとうございます。ということではありません。これからなされるイエス・キリストの十字架を

という救いの御業が始まろうとしていることに対する感謝です。

そして、「パンを裂く」とはイエス様が十字架の上で犠牲になって死なれるということです。だから、【主】の晩餐は徹底的にイエス様がなされた十字架の苦しみとそれによる救いを意識してなされたのです。

その上でイエス様は言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」・・・「あなたがたのため」というところに注目してください。イエス様の十字架は特定の個人のための救いではありませんでした。【主】に選ばれ召された弟子たち全員のための犠牲であり、そこには身分差や差別はなかったのです。そして、杯についての箇所も読みましょう。25節

11:25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

【主】イエスキリストの杯は、「新しい契約」を示すものでした。新しい契約とは動物の犠牲や律法による救いではなく、キリストの十字架によって恵みとして与えられる救いの契約です。当然、この新しい契約にも身分の差や立場の差は含まれていません。だから、私たちは【主】イエスキリストの十字架の犠牲によって、全ての神の民に恵みとして与えられた救いを、しっかりと心に刻むために聖餐式をするのです。だから、26節

11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

つまり、教会が聖餐式をするというのは個人の救いを記念してではなく、教会という群れに一切の差別なく恵みとしての救いを与えるために、イエス様が犠牲になり、十字架で死んでくださったこと、表すため、告げ知らせるために聖餐式をするのだとパウロは言っています。

ですから、みなさん、私たちは聖餐式によって「わたしがイエス様の犠牲によって救われて感謝」というだけではなく、「共にこの聖餐に預かっている私たち全体が、【主】イエスキリストの十字架の死による救いに預かっているのだ」ということを心に刻んでいくべきなのです。

だから、お金持ちが先に集いってバクバク食事をし勝手に満足をし、後からくる

貧しい人は愛餐に預かることなく聖餐式のためにのこされた僅かなパンとぶどう酒を飲むだけで済ませるというのは、聖餐の本質からかけ離れた行為なのです。

聖餐というのは、【主】がなされた愛の犠牲を覚えるためであり、教会全体にその恵みが与えられたということを覚えるためのものです。それなのに、それなのに自分勝手に食事をして、貧しい人たちに対する配慮の欠けたやり方というのは、明らかに間違っているやり方であり、聖餐の本質から考えれば害となるようなやり方だったのです。

3) 間違った聖餐の仕方に対する警告

だから、パウロはそうように愛のない聖餐の受け方をしている人たちに対して 27 節から 32 節で警告を発しています。

11:27 したがって、もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。

みなさん、ここまでくればわかりますね。「ふさわしくない仕方でパンを食べ」というのは、単純に罪を抱えた状態でパンを食べることではなくって、兄弟姉妹に対する愛を欠けた状態で聖餐に預かることです。だから、28 節の

11:28 だれでも、自分自身を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

とは、自分が個人的な罪を犯していないか吟味して聖餐を受けなさいということだけではなくって、教会の兄弟姉妹に対する愛を欠けた振る舞いをしていなかったかどうかを吟味して、聖餐に預かりなさいということです。

そして、そういった吟味が欠けた状態で聖餐に預かるものはさばきを受けることになるパウロは言っています。29 節、30 節を読みましょう。

11:29 みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。

11:30 あなたがたの中に弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいるのは、そのためです。

パウロはすごい事を言っていますね。どうも、当時のコリント教会には病弱な人や若くして死ぬ人たちが多かったようです。そして、その原因は愛のない聖餐式をしている人たちに対して【主】のさばきがあったからだと言っています。

これは当たり前のことですが、病気の人や死んだ人はすべて神様の裁きによってそうなっているということではありません。パウロが使徒としての権威によってコリント教会の状況を判断すると、彼らの上にある病気や死は、【主】の聖餐を軽んじ、自己中心で愛のないやり方によると見分けたから言っているのです。

みなさん、これは私たちには軽々しく言えないことですが、でも、【主】の聖餐を軽んじ、自己中心で愛のない聖餐の受けかたをすると、それは【主】のさばきを招くことになるということは、心に留めておくべきだと思います。

パウロはコリント教会の人たちを脅すためにこのように言っているわけではありません。むしろ、自分たちの今の状態を見分け、正しい状態に戻すために【主】が病気や死といった苦しみをコリント教会に与えているのだ。と言っているのです。だから、パウロは 31 節、32 節のように言っています。

11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。

11:32 私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。

みなさん、仮に、私たちがコリント教会のように間違ったやり方で聖餐式をしたとしても、私たちの救いが直ぐにはなくなるわけではありません。神様の懲らしめ、愛のムチとしてのさばきを経験することになるかもしれませんが、「自分をわきまえる」つまり、正しい聖餐の仕方に戻るのならば、その【主】の懲らしめも取り去られるのです。

4) 聖餐式に関する肯定的な勧め

だから、パウロは 33 節、34 節のように勧めています。

11:33 ですから、兄弟たち。食事に集まる時は、互いに待ち合わせなさい。

11:34 空腹な人は家で食べなさい。あなたがたが集まることによって、さばきを受けないようにするためです。このほかのことについては、私が行ったときに決めることにします。

「食事に来るときは、互いに待ち合わせなさい。」当時、聖餐式とセットになっていた愛餐をするのならば、貧しい人、後からくる人を無視してそれぞれが自分勝手に食べるのではなく、全員が集うのをまって愛餐をしなさいということです。つまり、他の兄弟姉妹への愛と配慮をもちなさい。ということです。

それができずに、ただ食事をしたいという人は、教会ではなくってそれぞれの家で食事をしなさい。とパウロは勧めています。

これはつまり、教会でも交わり、食事は、個人的な食欲を満たすためのものではなく、【主】にあって一つの群れ、共に【主】の恵みに預かっていることを確認するためにしなさい。といことです。

結論)

まとめます。みなさん、当たり前のことですが、聖餐とは私たちの空腹を満たすためのものではありません。【主】の民、全体に与えられた【主】イエスキリストの愛と、その犠牲を心に刻むためのものです。

だからこそ、この聖餐に預かる私たちは、個人的に罪を犯さないようにするのはもちろんのこと、兄弟姉妹に対する愛や配慮をもって、この聖餐に預かることが必要なのです。

みなさんは、この教会の兄弟姉妹を愛しておられるでしょうか。兄弟姉妹が劣等感や疎外感を覚えないように配慮して日々、振る舞っておられるでしょうか。

今日の聖餐式は、自分の罪だけでなく、愛の振る舞いができているかも踏まえて自分を吟味し、【主】の聖餐に預かっていきましょう。